

早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 26号―2 二〇一九年三月

一九〇四―一九〇六年の移動期における ダライ・ラマ十三世の主体的外交について

和田 大知

はじめに

近代以前において、ダライ・ラマは清皇帝との間に「施主と高僧の関係」を構築していた。これは高僧、つまりチベット仏教界の最高権威者であるダライ・ラマが、清皇帝を仏教の護持者であると承認すること、清皇帝が広汎な地域に住むチベット仏教徒に対して権威を有することに正当性を与え、一方で清皇帝はチベット仏教の施主としてチベット仏教及びチベットの安全を保障するという互惠関係であった。またこの関係は「チベット」のみならず、ダライ・ラマを頂点とするモンゴルや青海も含んだ広大なチベット仏教世界に影響力を持つものであった。清朝政府はチベットを「内地」と区別し、駐藏大臣を二名ラサに派遣してチベット政府との交渉のチャンネルとしていた。しかし十九世紀後半から西洋列強の進出を受けた清朝政府は、勢力圏を実効支配する必要を認識し始めていた。

当時イギリスはロシアとの間で中央アジアを巡る植民地獲得競争を繰り広げていた。インドから北上するイギリスの勢力圏に対抗し、ロシアはモンゴル方面に影響力を伸張させ、チベットはその両国に挟まれた最後の権力の空白となっていた。こうした中、一九〇三年に英領インドはヤングハズバンド大尉（一八六三―一九四二）率いる武装使節団をチベットに派遣した。翌年、同武装使節団がラサに迫ると、ダライ・ラマ十三世トウブテンギャムツォ（*thub bstan rgya mtsho*, 一八七六―一九三三）は自らの印璽をガンデン寺の座主に託し、ロシアの支援を求めてハルハ・モンゴル、イフ・フレー（庫倫、*Urga*、現在の *Ulanbaatar*）へと向かった。一九〇四年七月にラサ入りしたヤングハズバンド大尉は、ガンデン寺の座主を交渉相手とし英藏間にラサ条約を締結した。しかしチベットの条約締結能力を認めない清朝政府はこれに抗議し、英清間では「ラサ条約に関する同意協定」に向けた交渉が開始された。このような経緯の中で、チベット政府は自国

の国際政治におけるステータスについて自覚的にならざるを得なくなったのである。以降ダライ・ラマはモンゴル、青海、五台山、北京、英領インドを経て、通算九年間の国外移動を経験することになる。そして一九一二年にラサに帰国した後は蒙藏条約（一九一三年）及びシムラ条約への仮調印（一九一四年）といった、自国のステータスを近代国際社会の中に位置付けるための自主的なアプローチを図り始める。ダライ・ラマが「近代」に対する知見や認識を培ったのが、変動激しい国際情勢を目の当たりにすることとなった、英領インドの侵攻に始まる約九年間の国外経験だったといえよう。

二〇世紀初頭のチベットに関する先行研究の多くは、チベットとの関係当事国であるイギリス、ロシア、中国の研究者によって行われてきた。しかし英露における歴史研究は、チベットを主体として扱うというよりもむしろ、自国の外交史における客体として扱うに留まるものが多く、また中国における先行研究の多くは、チベットを領土下におさめている現状を肯定する観点から記述されており、結果としてチベットの主体性が矮小化される傾向が見受けられる。ダライ・ラマ十三世やチベット政府を主体とした歴史研究がこれまで十分になされてきたとは言い難い。

ただし、近年ではダライ・ラマの主体性に視点を置いた研究が少数ではあるが現れ始めている。たとえば「玉井 二〇〇一」⁽¹⁾はヤングハズバンド隊のチベット侵入に際して、チベット政府が清朝政府によって派遣された駐藏大臣の介入を重く取り合わず、単なるイギリス軍と

の仲介のルートとしてみなしていたことを明らかにし、「Shamian 二〇〇〇」⁽²⁾はロシア政府がイフ・フレーに滞在していたダライ・ラマとの間で密な協議を行っていたことを示した。また「石濱 二〇一三」⁽³⁾はダライ・ラマ十三世が辛亥革命の起こる四年前の一九〇九年、北京出立の後に清朝との関係断絶を表明していたことを明らかにした。「日高 二〇〇七」⁽⁴⁾はダライ・ラマの清朝への姿勢が「皇帝個人」に対するものと「国家としての清朝」に対するもので区分できる可能性があることを示し、一方で「小林 二〇一四」⁽⁵⁾は「近代への適応」といった視点から、ダライ・ラマ政権が「独立」や「領域」といった近代諸概念を獲得した際の経緯や、その理解の程度についてを明らかにしてきた。また、「Sperting 二〇一」⁽⁶⁾は一九〇七年以降、ダライ・ラマが五台山において、同地がモンゴル・中国の境界に位置するという地理的要因と、そのチベット仏教の聖地としての宗教的要因に保護されて、自律的に諸外国の使節と外交を行っていたことを示し、「白須 二〇〇七」⁽⁷⁾はダライ・ラマが同時期に日本の民間外交官とも呼び得る寺本婉雅などと積極的に会合し、日本との連携も視野に入れていたことを明らかにした。

本論文はこうした、チベットの主体性を重視した近年の諸研究と視座を同一にし、かつ、先行研究によって十分には扱われていないダライ・ラマ十三世のモンゴル内移動期（一九〇四―一九〇六）における活動の態様や国際認識の変遷などについて明らかにするものである。主に『清末十三世達賴喇嘛檔案史料選編』に含まれる檔案

史料と、*Россия и Тибет: Сборник русских архивных документов* 1900-1914に含まれるロシアの公文書史料を使用し、当該地域を扱う関係諸国の同時代史料をその補完に用いた。文中の年月日はグレゴリオ暦に統一した。

一、ラサ出立からイフ・フレール到着まで

一九〇三年五月、インド総督カーゾンにはカンパゾンにおける英清蔵間でのラサ条約交渉を開始することを要求したが、その過程でイギリス兵が国境を越えると、ダライ・ラマ政権は自重を促す清朝政府を無視して彼らとの対決姿勢を示した。イギリス兵との戦闘に敗北したダライ・ラマ政権は、当初は駐藏大臣をイギリスとの交渉チャンネルの一つとして扱っていたが、イギリス軍がチベット本土に迫ると駐藏大臣を間に挟むことなくイギリスとの直接交渉を開始する⁽⁸⁾。この時点ですでにダライ・ラマ政権は清朝政府の意向に従うことなく、自主自律的な行動を志向していたのである。

一九〇四年七月二十六日、ダライ・ラマ十三世は八人の供回りを連れラサを脱出し、ロシアの支援を求めてイフ・フレールへと向かった。この行動の背景にあるのはダライ・ラマ十三世の側近の一人でロシア領内ザバイカル出身の僧侶、アグワン・ドルジェフ (Agvan Dorjiev) の存在であった⁽⁹⁾。ドルジェフはダライ・ラマ十三世に、ロシア領内のチベット仏教徒が信仰の自由を享受していることや、ロシアの支援を得ることが得策であることなどを助言しており、ダライ・ラマ十三世

がイギリスの侵略を受けてイフ・フレールへ向かうことについてもロシア側と協議していた⁽¹¹⁾。こうした背景があったうえで、ダライ・ラマ十三世はラサを離れることを決意したのであった。

一方で清朝政府はダライ・ラマのこうした行動の詳細を把握していなかった。駐藏大臣有泰はダライ・ラマの不在を後に知り、その行方を探していたものの不明であった⁽¹²⁾。八月二十一日、有泰がダライ・ラマの称号剥奪とパンチェン・ラマによる地位の代行を清朝中央に打診すると、同月二十六日にはこれが軍機大臣に諭旨として下った⁽¹⁴⁾。清朝政府は最終的にウリヤスタイ將軍連順からの報告により、ダライ・ラマ十三世がモンゴルに入ったことを知った。連順の派遣した官僚は十一月七日に「ラミンゲゲン廟」でダライ・ラマに接見し、ダライ・ラマにウリヤスタイで休息するよう要請したが、ダライ・ラマはこれを拒否してイフ・フレールに向かってしまった⁽¹⁵⁾。

清朝中央がダライ・ラマのイフ・フレール訪問について具体的な対応を始めたのは十一月三日、西寧辦事大臣を務めていた延祉に対して、イフ・フレールに行つてダライ・ラマを「迎護」するよう命を下したことに始まる⁽¹⁶⁾。また、延祉がイフ・フレールに到着するまでは、現職の庫倫辦事大臣である德麟が「救いを求めている」ダライ・ラマを十分に「安撫」し「照料」、つまり世話をするよう指示が出された。延祉は戸部からダライ・ラマに授与するための銀六千両を受け取り、十一月八日にイフ・フレールに向けて出立した。十二月十二日、イフ・フレールに到着した延祉は六千両を「辺防賞需」の名目でダライ・ラマ十三世に

授けた。⁽¹⁷⁾すでに称号を剥奪している手前、清朝としてはダライ・ラマのイフ・フレエの滞在に名目を付けざるを得ず、それが「辺防」だったのである。しかしダライ・ラマがイフ・フレエで行っていたことは清朝の「辺防」にとって必ずしも望ましいものではなかった。

二、イフ・フレエ滞在期間

・ロシア政府の対応

ダライ・ラマがイフ・フレエに到着した当初、在北京ロシア公使レッサー（II. M. Lessar, 一八五―一九〇五）はダライ・ラマをイフ・フレエに留め置くことがロシアの国益に資すると考えていた。一九〇四年十一月六日付のレッサーから外務大臣ラムズドルフ（B. H. Ramsdorff, 一八四四―一九〇七）への報告書によれば、ダライ・ラマがロシアやモンゴル、インドに跨る広域、つまりチベット仏教世界において権威を有する精神的指導者足り得るならば、将来的に彼をロシア国境内に招聘することで、ロシア国内に宗教の「共通の中心」を構築することができるのであった。⁽¹⁸⁾一方で、ダライ・ラマの招聘を含む具体的な対応については日露戦争が決着し、ロシアの極東政策の方針が確定するまで保留とし、当面はモンゴル内の平穏を保ち、清朝政府の警戒を避けるべきであるという結論が出された。

結果、ダライ・ラマはイフ・フレエに留められ、ロシア政府はその信頼を得ることについては重要視しつつも、チベットおよびダライ・ラマに対して表立った支援提供を行うことには消極的であった。実

際、一九〇五年一月の段階で、在イフ・フレエロシア領事は「領事館秘書」やドルジエフを介して間接的にダライ・ラマと連絡を取り、直接面会することはなかった。⁽¹⁹⁾そして対外的には、ロシア政府のダライ・ラマへの関与は、ロシア領内のチベット仏教徒の信仰に益する範囲のものであるという姿勢を示すに留めていた。⁽²⁰⁾

・ダライ・ラマ十三世とチベット政府の反応

ダライ・ラマはイフ・フレエに到着すると、イギリスと交渉するに際しての助言を求めるべく、連絡要員の派遣をロシアに求めた。⁽²¹⁾しかしレッサーはこれに応じず、日露戦争が決着するまでは清朝政府の反応を抑えておく必要があるとして、自国の抑制的な姿勢をダライ・ラマに説明したのであった。⁽²²⁾

一方、チベット本土やダライ・ラマの側近たちの間では、ダライ・ラマがイフ・フレエを訪問したにもかかわらず、支援の姿勢を明確にしないロシアに対する不信感が高まっていた。一九〇五年一月、ラサからイフ・フレエを訪れたチベットの使節団は、ダライ・ラマのラサへの帰還を嘆願しつつ、ロシアからの支援が獲得できないのであればフランスやドイツの支援を要請してどうかとダライ・ラマに進言した。⁽²³⁾一九〇五年四月二十七日付の在イフ・フレエ領事リュバ（B. O. Lyba, 一八六一―一九二二）による報告は、ダライ・ラマが個人的にロシアを信頼していた一方で、ドルジエフ以外の側近たちはロシアからの支援を諦観し、英藏問題を他の西洋列強やハーグ常設仲裁裁判

所に申し送りすることについて議論を行っていたと伝えている。⁽²⁴⁾ ダライ・ラマの側近たちの間で国際常設仲裁裁判所の活用が議論されていたことは、当時のダライ・ラマの国際社会への理解の程度を推し量るうえで非常に興味深い。⁽²⁵⁾

また、ダライ・ラマはリュバに対して、ロシア政府がチベットの保護を列強諸国に表明できるかどうか尋ねている。ダライ・ラマはロシアに対して、チベットにおけるイギリスの脅威の排除という喫緊の問題解決に加えて、チベットの後ろ盾としての機能を果たすよう求めていたのである。しかしダライ・ラマはレッサーの後任者ポコティロフ(Д. Д. Покотилов, 一八六五—一九〇八)から、従前と同様に現状チベットへの支援を表立って公表することはできないという返答を受けることになる。⁽²⁶⁾

このようなロシア政府の消極的な姿勢に対して、ダライ・ラマは独自の外交を展開し始める。一九〇五年四月、ダライ・ラマはドルジエフをサンクトペテルブルクに派遣することで、ロシア政府のチベットへの関心を高めようとした。ザバイカル周辺に至っていたドルジエフはロシア政府からイフ・フレーに帰還するように促されたが、ドルジエフはこれを拒否し、自分が強制的にイフ・フレーに送還されたなら、ダライ・ラマの心象を害するだけでなく、ドルジエフ自身も露藏間の友好のために活動することをやめると宣言した。さらにドルジエフはロシア政府に対して、ブリヤート人への宗教的恩恵を名目としてダライ・ラマのイフ・フレー滞在を数ヶ月延長するよう清朝

政府に交渉することも要求した。⁽²⁷⁾

ダライ・ラマはドルジエフに託したロシア政府への親書の中で、チベットにおけるイギリスの脅威の排除とそのためのラサ条約の撤廃を要請している。またチベットが「文明化された列強諸国の輪にともに入ること」を望み、ドルジエフに「どんな国とも合意に達することのできるよう権限を与えた」としている。⁽²⁸⁾ ダライ・ラマはロシアがチベットの後ろ盾としての立場を表明することを期待しつつ、状況打開のために他の西洋列強諸国との間で近代的な条約締結を行うことも志向していたのである。

しかし、一九〇五年のこのドルジエフのロシア訪問がロシア政府の姿勢を変えることはなかった。ドルジエフは「王や大臣は、チベットを助けねばならないが、現在は日本と戦って負けたのでいささか都合が生じているものの、やがて援助しましょう」という返答を受けたのである。⁽²⁹⁾ これを受けてダライ・ラマは、日露間の和平交渉の仲介を行うことを申し出た。リュバによれば、ダライ・ラマは「日本と関係を構築して宗教的影響力を及ぼす」ことで日露間の和平交渉の促進を行おうとしていたのであった。⁽³⁰⁾ イフ・フレーにおける滞在中、ダライ・ラマは国際情勢の変化によるロシアのチベット支援の積極化に期待を有しつつ、一方で自発的に状況改善のためにも動いており、その一環として国際社会への参画も企図していたのである。

・清朝政府との応対

清朝政府は一九〇四年八月二十六日の時点でダライ・ラマの称号を剥奪しており、パンチェン・ラマをその後任に据えようとしていた。しかしダライ・ラマの代理を打診されたパンチェン・ラマは、イギリス兵の留まるツァンを離れることはできないとこれを断つた。⁽³¹⁾実際にラサでダライ・ラマの代理を行っていたのは、ダライ・ラマ十三世が印璽を託したガンデン寺の座主であった。⁽³²⁾一九〇五年七月一日、有泰は清朝政府によるダライ・ラマの称号剥奪がチベット人の清朝政府に対する信頼を損ないかねないとして、中央に対してダライ・ラマの称号回復を要請することになる。⁽³³⁾こうした清朝政府の態度の軟化の背景には、ダライ・ラマが清朝から完全に離反することへの危機感もあった。ダライ・ラマのイフ・フレー訪問当初、連順は、清朝からの冷遇を受けたダライ・ラマが、ブリヤート人の招きに応じてロシア領内に移動してしまう危険性を唱え、ダライ・ラマを厚遇するよう上奏している。⁽³⁴⁾

一九〇五年四月十六日、延祉はブリヤート人とロシア政府の関係について興味深い報告を行う。⁽³⁵⁾ブリヤート人による窃盗事件がおき、ロシア領事が延祉に対して警護の兵士を派遣するよう要請してきたため、延祉は、ブリヤート人はロシア臣民なのでそちらで処理するように申し渡した。しかしロシア領事は、ブリヤート人は出入境の際に票（査証）を用いず、イフ・フレーに入ってからモンゴル人と混在してしまうためその監査が困難であると返答したのである。延祉は口

シア領事には、ブリヤート人への監督責任を負う姿勢が見受けられないとしている。興味深いのは、延祉がロシア領事の言葉を、将来ブリヤート人がダライ・ラマをロシア領内に招聘した際に、ロシア政府がその責任を回避するための布石であると暗に指摘したことである。ダライ・ラマとの関係について、ロシア政府が自国内の仏教徒を口実にしていた経緯を踏まえれば、延祉の見立てには一定の妥当性がある。

このように、現地の清朝官僚はダライ・ラマとブリヤート人の関係の背後で、ロシア政府とダライ・ラマが接近していることを一定程度把握していた。ダライ・ラマとロシアの接近を憂慮した清朝政府は、ダライ・ラマに対して再三イフ・フレーを離れ西寧に赴き、そこからチベットに帰還するよう命令していた。しかしダライ・ラマは一九〇四年十一月にイフ・フレーに到着して以降、約十か月にわたってこの命令を拒み続けた。

清朝皇帝はダライ・ラマがイフ・フレーに到着した当初から西寧への移動を命じていた。しかし、ダライ・ラマ十三世は、冬季の移動の困難を理由にこの命令を拒否し、同地での越冬を申請した。⁽³⁶⁾一九〇五年二月十五日付の諭旨では、イギリス軍はもはやチベットを占領しておらず、すでに「平静でありすべてが常のよう」であるとして、ダライ・ラマが西寧を経由して即座にチベットに帰還するべきであると命じられた。⁽³⁷⁾この命令を受け取ったダライ・ラマは、チベットがすでに平穏なことを認めつつ、自身のチベットへの帰還に関しては「状況が

難しいので」「時勢を注意深く観察して」決定すると、言葉を濁しつつも即座の帰還については明確に拒否している。³⁸⁾この後もダライ・ラマは、出立の期日決めるよう要求する延祉ら現地官僚に対して、具体的な移動ルートの決定を巡って期日の画定とは別に抗弁を続けていく。この時ダライ・ラマは出立期日を五月十七日に設定したが、³⁹⁾後日この日付は五月二十七日に再度延期され、さらに翌二十八日付の論旨では、ダライ・ラマが病を患ったことを理由に、その療養まで出立が延期されることが示されるのである。⁴⁰⁾ダライ・ラマがイフ・フレールを出立したのは「病」が回復した九月十五日になってからのことであつた。⁴¹⁾ロシア語史料にみられるダライ・ラマ十三世の言動と照らし合せれば、ダライ・ラマはロシアからの支援を受けられるように状況が好転することを期待してイフ・フレールに滞在しており、ゆえに「病」という口実を設けてでも清朝の命令を躲していたことがわかるであろう。

三、ハンダドルジ旗での滞在期間

ダライ・ラマはロシアが対英関係上の庇護者となることを期待してイフ・フレールを訪れた。しかしロシア政府にとって、チベット支援の公式表明やダライ・ラマのロシア領内への誘致については状況が変化した場合のオプションに過ぎず、当面の優先課題は、将来的に利用するためのダライ・ラマの権威保全と身体安全保障であつた。ロシアからの確言を得られないままイフ・フレールの転生僧、ジェブツンダンパ

八世との確執が深刻化したため、⁴²⁾一九〇五年九月十五日、ダライ・ラマはハンダドルジ親王の招請に応じた。ダライ・ラマは翌年三月までイフ・フレールの西方に位置するハンダドルジ旗に滞在し、サンクトペテルブルクに派遣したドルジエフを介してロシア政府との交渉を継続することで、チベットに帰還する前に自身の置かれた状況が好転することを待ち続けた。

ドルジエフは、九月二十九日付のロシア外務省宛の手紙の中でチベット側の要求を示している。まず、チベットにおいてイギリスの脅威が継続していると訴え、チベットにイギリスとの友好関係を樹立するつもりは当面ないと訴え、イギリスがチベットとの間にラサ条約を締結しておきながら、清朝政府のチベットに対する宗主権を認めている現状の矛盾点を指摘し、ダライ・ラマの地位に関するステータスを画定する必要があると説明した。またドルジエフは将来的に列強諸国からラサに、各国の代表を招くことを要求した。これはチベットが独立国であることの承認をうけるためであつた。そのうえで、ダライ・ラマがチベットに帰還する要件として、駐藏大臣のラサからの撤退とラサ条約の無効化、そしてダライ・ラマを国の最高統治者とする新条約の締結を求めた。また移動の道中に関しては、清朝政府の護衛が信用ならないために、ロシア政府が護衛を派遣するよう求めた。⁴³⁾

これに対してロシア外務省の返答は老獪なものであつた。ロシアの外交努力によって現在英中間で行われている協議がダライ・ラマに有利に働くように進展していると前置きし、ロシアが今以上に公にチ

ベットを支援すれば事態を悪化させる恐れがあると説明した。そしてダライ・ラマがラサを不在にすることが清朝のチベットに対する影響力を増大させ、そのモンゴル滞在を延長することが、チベットにおけるダライ・ラマの権威を低下させるとし、速やかなラサ帰還を促したのである。また、ラサへの各国の代表派遣については英中間の協議の結果次第であるとの説明がなされた⁽⁴⁴⁾。

説明を受けたダライ・ラマは三月八日の時点でリュバに対し、ラサへ帰還することに同意した旨を伝え、同月末頃にハンダドルジ旗を出立すると表明した⁽⁴⁵⁾。このことから、ダライ・ラマの移動は清朝の命令に基づいた結果ではなく、ロシアの援助を得られないことが確定したための自発的なものであったことがわかる⁽⁴⁶⁾。一九〇六年三月七日にドルジェフからニコライ二世に送られた手紙の中で、ダライ・ラマは「ほかの事々に関する心配」が、ロシアをチベットへの支援から遠ざけたことを理解していると述べている。そしてそのうえでロシアの調査隊や旅行者が将来的にチベットを訪れることを歓迎した⁽⁴⁷⁾。ダライ・ラマは日露戦争の敗北や、第一次ロシア革命の勃発といったロシアの苦しい立場を理解したうえで、チベットとロシアの間に存在する一定の友好関係を維持存続させようとしていたのである。

ロシア政府は、清朝政府からダライ・ラマの道中の身の安全に関する保証を取り付け、イギリスが「チベットの一定程度の政治的独立の保全」を約束したことをダライ・ラマに提示した⁽⁴⁸⁾。この二点の保証を受けたダライ・ラマは、ラサに向かうことを受け入れつつ、ロシア

政府が今後イギリスのチベットに対する権限を制限する方向で調停に入ってくれるかどうか尋ねた。また、それに関連してラサに外交員を派遣するようにも要請した⁽⁴⁹⁾。ダライ・ラマ十三世はロシアおよび自身の置かれた状況を把握し、善後策を講じていたのである。

四、ダライ・ラマの青海への移動 清朝官僚への対応

清朝政府は当初ダライ・ラマをロシアから遠ざけ、その行動を管理しようとしていた。清朝中央はダライ・ラマの移動に延祉とその任命による清朝官吏を同行させ、また一行が通過する地域の清朝官僚が協力してその迎送に努めるよう、再三の命令を下した⁽⁵⁰⁾。清朝檔案の中において、ダライ・ラマは「護送」「迎護」という形式で、一定の敬意を払われつつも管理下におかれたものとして位置づけられている。しかしモンゴル内の移動に関して、清朝官僚がダライ・ラマに対して事実上の監督権を行使できていたとは言い難い状態であった。

イフ・フレーにおいて、延祉は当初、張家口から大同を抜けて西寧へと向かう、清朝の駅伝を利用して中国内地を経由するルートでダライ・ラマを移動させようとした。しかしダライ・ラマは自身がラサからイフ・フレーへ移動する際に辿ってきた、モンゴルから直接青海を抜けるルート、すなわち「西路」での移動を主張した⁽⁵¹⁾。延祉はこれを受け入れたが、その際、「西路」方面のモンゴル人チベット仏教徒がダライ・ラマの移動に必要な駅伝を準備できると記している⁽⁵²⁾。この「西路」での通行は、内地の清朝政府によって管理されている駅伝で

の移動に比べて、現地での滞在準備や物資の調達をダライ・ラマが自身の宗教的権威に基づいて行う点において、その自主性が際立つことを忘れてはならない。

ダライ・ラマは一九〇五年九月十五日にイフ・フレールを出立してから翌年三月までの間、トゥシェート・ハン部ハンダドルジ旗に滞在していた。清朝中央は延祉とウリヤスタイ参贊大臣奎煥に命じてダライ・ラマの一行を速やかに西寧に向けて移動させるよう命じたが、同地でロシアとの交渉が続いていたダライ・ラマは、イフ・フレールの時と同様これを拒否した。⁽⁵⁴⁾清朝中央はダライ・ラマの当地での越冬を許可し、実際ダライ・ラマは雪解けと共に出立することになる。⁽⁵⁵⁾

また、延祉はダライ・ラマのハンダドルジ旗からの出立に関する報告の中で、ダライ・ラマがサインノヨン部を目指して、三月二十一日に出立することを「定」めたので、一行に同行させた蒙古五品官、車林彭楚克（ツェリンブンツォク）にダライ・ラマの前進を「照料」するように命じたと記している。しかし行き先であるサインノヨン部の様子については、同行するツェリンブンツォクの到着とその報告を待たなくてはわからなかったようである。⁽⁵⁶⁾ダライ・ラマに同行する清朝官僚がダライ・ラマの行動を管理できていない様子が見える。

その後ダライ・ラマはサインノヨン部ザヤ・パンディタ・ホトクトのフレールからエジナ・トルグートを經由してそのまま青海クンブム寺に向かうことを主張し、それは実現した。⁽⁵⁷⁾ザヤ・パンディタ・ホトクトのフレールから西寧、青海クンブム寺にかけての道のりはゴビ砂漠を

越える過酷な環境である。清朝は、ダライ・ラマの「迎護」のため、サインノヨン盟内は現地の盟長に支援を命じ、エジナ・トルグートに入った後は西寧辦事大臣、陝甘総督、キャフタ参贊大臣に援助を要請することになっていた。⁽⁵⁸⁾このように清朝がゴビ砂漠を越えるための臨時の駅伝を構築しようと模索している中、ダライ・ラマは面会に来た奎煥に対して、イフ・フレールから同行してきた蒙古五品官、ツェリンブンツォクを解任するよう要請した。両者の仲が「氷炭相容れない」状態になったことを理由に、延祉はツェリンブンツォクをイフ・フレールに呼び戻した。⁽⁵⁹⁾奎煥はダライ・ラマについて「性情頑固遇事只好順性而導之」と説明しており、⁽⁶⁰⁾ダライ・ラマ十三世と清朝官僚の関係の悪さを伝えている。

八月二十六日、ダライ・ラマはエジナ・トルグート通行の過酷さを理由に荷駄の半数をチベットに送り、ザヤ・パンディタ・ホトクトのフレールを出立した。その後九月十日にサインノヨン盟境界からエジナ・トルグートに入り、十三日にはトルグート貝勒府に到着する。⁽⁶¹⁾

同時代史料からは、エジナ・トルグート路に臨むダライ・ラマ一行の具体的な様相が見える。クンブム寺でダライ・ラマを待っていた寺本婉雅が、現地で接触したアラシャンのモンゴル人から聞いた情報によると、ダライ・ラマは四月頃にアラシャン王に書を送り、自身の一行の規模を伝え、アラシャンの地を通過とそこの滞在について問い合わせたものの、アラシャン王は一行の規模に応じることのできるほどの備蓄や飲料水が準備できないとしてこれを謝絶したという。寺本

は、ダライ・ラマには道路の通行に関して沿道にその準備をさせる力がなかったとしつつも、ダライ・ラマ一行の規模の大きさがその通行する経路の選択肢を狭めていたことを指摘している。⁶²

また一九〇八年四月にハラホト遺跡を発見したロシアの探検家コズロフは、その周辺、つまりエジナ・トルグートをダライ・ラマ一行が通行した際の様子について聞き及んでいる。当該地方を治めていたトルグート・バイレ（貝勒）は、当初ダライ・ラマの一行に物資を提供することを拒んだ。すると「わがままなチベットの役人はカンカンに怒って、トルグート人を脅かして「アルバン」を実行するように強制した。つまり、一定数の荷馬車を作らせたのである。その際彼らはバイレの副官を侮辱し、さらに暴行を加えたといわれる」。⁶³

上述の二つの史料からは、ダライ・ラマがサイン・ヨン部から青海への経路を模索するにあたって自発的に滞在場所を探し選択していたことや、現地での物資確保においても独自に行動していたことがわかる。一九〇六年十月十一日付の奎煥の報告では、各モンゴル旗が尽力して協力し、現地の官吏は誠心誠意これを管理し、少しも阻まれ遅れることなくダライ・ラマを西進させた、と一行のモンゴル内移動の事情が総括されている。⁶⁴しかし同じ奎煥の言葉を借りれば、ダライ・ラマの「迎護」に関しては実際のところその「性分に従うしか」なかったというのが内実だったのである。清朝檔案には「迎護」や「護送」といった言葉によって、清朝官僚によるダライ・ラマに対する監督権の外観が表れている。しかしにもかかわらず、ダライ・ラマはモンゴ

ル内の移動においてその自律性を維持していたのである。

おわりに

一九〇四年、ダライ・ラマ十三世はイギリスに対抗するため、駐蔵大臣に行き先を告げずラサを発ち、ロシアの支援を求めてイフ・フレーに向かった。清朝がその行く先を把握するのは三ヶ月後であり、イフ・フレーに滞在するダライ・ラマにロシアから離れるように何度も帰還命令を出したものの、ダライ・ラマ十三世は言を左右にして応じなかった。ダライ・ラマが移動したのは一九〇五年九月十五日になつてからであつた。この間、ダライ・ラマはイフ・フレーに留まり、国際情勢の変化とロシアの支援を期待していたが、その側近の中にはフランスやドイツへの支援要請や、ハーグ常設仲裁裁判所への提起といった国際的な解決策を挙げるものもいた。また、全権を付したドルジェフのサンクトペテルブルク派遣や、列強諸国との条約締結の試みからは、ダライ・ラマが近代国際社会へのアプローチをも志向して、自発的に状況を打開しようとしていた様子が伺える。ダライ・ラマがロシア国境を離れ南下することに同意したのは、期待していたロシアの支援を得られないことが確定したためであつた。モンゴル滞在期間において、ダライ・ラマ十三世は自主的に外交を展開し、自律的に自身の移動にまつわる行動を決定していたのである。

注1

- (1) 玉井陽子 (二〇〇二)「一九〇四年ラサ条約交渉における駐藏大臣の役割―ダライラマ政庁との関係を中心に」『中央大学アジア史研究』25。
- (2) Shaumian, Tatiana. 2000. *Tibet: the Great Game and Tsarist Russia*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- (3) 石濱裕美子 (二〇一三)「ダライラマ13世の著作に見る自称表現と政体表現の変化について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』24。
- (4) 日高俊 (二〇〇七)「ダライラマ13世二度目の亡命の意義について」『日本西蔵学会会報』53。
- (5) 小林亮介 (二〇一四)「チベットの政治的地位とシムラ会議 翻訳概念の検討を中心に」岡本隆司編『宗主権の世界史―東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会。
- (6) Sperling, Elliot. 2011. "The Thirteenth Dalai Lama at Wutai Shan: Exile and Diplomacy." *Journal of the International Association of Tibetan Studies*, No. 6.
- (7) 白須浄真 (二〇〇七)「1908 (明治41) 年8月の清国五台山における一會談とその波紋―外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊」『広島大学大学院教育学研究科紀要』56-2。
- (8) 玉井 二〇〇一
- (9) ドルジエフについての先行研究は数多いが、概説は 棚瀬慈郎 (二〇〇九)『ダライラマの外交官ドルジエフチベット仏教世界の20世紀』岩波書店・に詳しい。ドルジエフは一八九八年、一九〇〇年、一九〇一年に三度にわたってダライ・ラマの使節としてサンクトペテルブルクを訪問し、ロシア、チベット間の外交関係樹立へと向けた交渉を行っていた。ダライ・ラマの親露的な意識の形成や近代的な国際認識の醸成はドルジエフに依るところが大きかったと目される。
- (10) 棚瀬慈郎 (二〇〇五)「ドルジエフ自伝」『人間科学』17、18。
- (11) Andreyev, Alexander. 2001. "An Unknown Russian Memoir by Aagvan Dorjiev" *Inner Asia*, Vol. 3, No. 1 内付録のドルジエフの手記

"Biography of the Senior Tsanit-Khambo, attached to the person of the Dalai Lama, Lharambo Agyan Dorjiev".

- (12) 中国第一歴史档案館編 (二〇〇二)『清末十三世達賴喇嘛档案史料選編』中国蔵学出版社・No. 99. (以下「十三世档案」)
- (13) 十三世档案・No. 89.
- (14) 同上・No. 90.
- (15) 同上・No. 94.
- (16) 同上・No. 93.
- (17) 同上・No. 96, 122.
- (18) Белов Е.А. ed. 2005. Россия и Тибет : сборник русских архивных документов 1900-1914. Восточная литература. No. 23, 24 (以下「Pu T」)
- (19) Pu T, No. 27.
- (20) Shaumian 2000: 91. 清朝政府がダライ・ラマに西寧への移動を命じた際、レツサーはダライ・ラマの西寧への強制的な移動は自国のチベット仏教徒に動揺を与えると主張し、もし実行されたならロシア政府は自国の仏教徒救済の観点からこれに反対すると清朝に通達している。
- (21) Pu T, No. 27.
- (22) Ibid., No. 31.
- (23) Ibid., No. 28.
- (24) Ibid., No. 39.
- (25) 石濱裕美子・井上岳彦 (二〇一八)「ロシア科学アカデミー公文書館所蔵チベット文三書簡の歴史的意義」『内陸アジア史研究』33. では、カルムイク・ドルベト族のノヨン、ツェリンダウーが、一九〇四年から一九〇五年にかけてダライ・ラマ十三世に宛てた書簡の中に「デン・ハグ」が登場することを取り上げ、当時ロシア東方の諸族の間で、ニコライ二世が提唱した第一回万国平和会議と、その結果設置された常設仲裁裁判所がどのように見なされていたのかに関する考察を行っている。
- (26) Pu T, No. 39.

一九〇四―一九〇六年の移動期におけるダライ・ラマ十三世の主目的外交について (和田)

- (27) Ibid., No. 41.
- (28) Ibid., No. 42.
- (29) 棚瀬二〇〇五
- (30) Pu T., No. 43. ドルジェフは一九〇〇年にサンクトペテルブルクに向かう途中で長崎に寄港している。ダライ・ラマが日本について聞き及んでいたことが推測される。
- (31) 十三世檔案, No. 102.
- (32) 同上, No. 138.
- (33) 同上, No. 116.
- (34) 同上, No. 94.
- (35) 同上, No. 108.
- (36) 同上, No. 95.
- (37) 同上, No. 101.
- (38) 同上, No. 103.
- (39) 同上, No. 106.
- (40) 同上, No. 111, 112.
- (41) 同上, No. 117.
- (42) 石濱裕美子（二〇一七）「ダライラマ13世の僧院の綱紀肅正とその意義について」『桜文論叢』86（長沼宗昭教授古稀記念号）ジェブツンダンバ・ホトクト八世とダライ・ラマが緊張状態にあったことはよく知られている。ダライ・ラマの来訪によるジェブツンダンバ・ホトクトの権威の相対的低下と布施の減少がその理由としてこれまで多く指摘されてきた。「石濱二〇一七」はチベット仏教世界における「中央と地域」の関係からこの権威の低下や緊張関係の内実を示した。
- (43) Pu T., No. 44.
- (44) Ibid., No. 45.
- (45) Ibid., No. 52.
- (46) 十三世檔案, No. 124. ダライ・ラマは清朝官僚に対して、自ら三月二十一日の出兵を通過している。
- (47) Pu T., No. 51. なお、小林亮介（二〇一七）「ロクヒルと近代チベット――その清朝・チベット関係史の成果を巡って」『斯波義信、岡本隆司編『改訂増補モリソンパンフレットの世界』東洋文庫。では、一九〇五年にダライ・ラマ十三世がアメリカの外交官ロクヒル（W. W. Rockhill）と交流を開始した際の経緯について、当時欧米諸国の東洋学者がダライ・ラマへの接近を試みていた一方で、ダライ・ラマもまたこうした動きに呼応して、広く西洋諸国との関係構築を志向していたと考察している。ダライ・ラマの調査隊受け入れの提案は上記のような文脈の中にも位置付けることができよう。
- (48) Pu T., No. 47.
- (49) Ibid., No. 52.
- (50) 十三世檔案, No. 110.
- (51) 同上, No. 104.
- (52) 同上, No. 106, 109.
- (53) 同上, No. 118.
- (54) Bulag, Uradyn E. 2013. "Introduction: The 13th Dalai Lama in Mongolia, or the Dawn of Inner Asian Modernity." Samplador Chuhun & Uradyn. E. Bulag eds., *The Thirteenth Dalai Lama on the Run (1904-1906)*: Archival Documents from Mongolia. Leiden: Boston: Brill はダライ・ラマ十三世のモンゴル滞在期に関するモンゴル語史料を編纂したものである。その前文で、ハンダドルジ親王が自分ではダライ・ラマを移動させることができないと清朝中央に訴える報告書があることが紹介されている。
- (55) 十三世檔案, No. 121.
- (56) 同上, No. 124.
- (57) 同上, No. 130.
- (58) 同上, No. 130.
- (59) 同上, No. 131.
- (60) 同上, No. 130.
- (61) 同上, No. 133.
- (62) 寺本婉雅（一九七四）『蒙藏旅日記』芙蓉書房、二〇二頁

- (63) コスロフ著 西義之訳 (二〇〇四) 『蒙古と青海』 白水社、九二頁
(64) 十三世档案、No.133.

付記

本研究は JSPS 科研費 JP18J22977 の助成を受けたものである